

- 25 『陶説』説古四八「格古要論……宋文丞相過此。窯變為為、遂不燒」。
- 26 『陶説』説古四一「清秘藏。論窯器、必曰柴汝官哥定。柴不可得矣。余向見殘器一片、製為緣環者」。
- 27 鄭若曾『日本図纂』（一五六一年）・『籌海図編』（一五六二年）、茅元儀『武備志』（一六二二年）などの「倭好」に「碗碟以菊花稜為尙。碗亦以葵花稜為尙。制若非
- 28 觚雖官窯不喜也」との記述が見える。
- 29 御窯は清朝官窯製品のうち特に質の高いものを指す。
- 30 金海、熊川、紅葉、早船、渡唐屋Ⅱ斗々屋、御本、判使Ⅱ半使はいずれも高麗茶碗の種類名称。
- 31 仏郎嵌のこと。明清代に制作された七宝技法の製品。
- 32 底本及び大宅翻刻では不明二字とされているが、東博所蔵瑠璃釉皿から「恢古」を採用した。
- 33 黒牟田焼のこと。
- 34 鍋島直茂のこと。
- 35 「呉祥瑞」を制作者の名と考え、伊勢松坂の陶工（桂川中良『桂林漫録』寛政一二年）、伊勢津の人（稲垣黙齋『茶道筌蹄』文化三年）、伊勢飯高郡大口村の五郎大夫次男（金森得水『本朝陶器攷証』安政四年）、伊勢の陶工伊藤五郎大夫（石割松太郎『祥瑞の研究』）など日本人陶工とする説が近世から近代にかけて唱えられた。さらに『本朝陶器攷証』などでは有田焼に関して「山田五郎大夫に始る……五郎大夫帰朝の後、火候を験するに、伊万里の近所なる有田皿山の地、火候烈にして染付に合を以て、同所にて焼ものを始むと云」と記されるなど、呉祥瑞をその創始者とする言説があった。
- 36 『肥前名物題注』（千住西亭文書、個人蔵）のこと。肥前の名産品一三七点を挙げ、簡単な説明を付したものの。第八に「磁器」を挙げる。作者不明、嘉永・安政頃の成立と推定。『肥前史談』第一三巻第五・六号（肥前史談会、一九三九）に所蔵者の千住武次郎が全文を読み下して紹介したことからその存在が広く知られ、今日でも近世佐賀の産業・工芸に関する基礎資料としてしばしば引かれる。千住は紹介にあたり磁器の項に「再註」を付して『日祖韓役の所俘云々始て漢津に陶し、後有田に移る。是を本山と号す』と、あるが之は誤りで、矢張李參平を開山とすることは、今日陶磁史家の定論であるから、一寸訂正して置く」と述べているが、これは同人が佐賀中学校長在任中の大正六年（一九一七）、「陶祖李參平之碑」の撰文を草したことと関係しているものと思われる「宇治、二〇一七・二三」。以下、佐賀県立図書館蔵の千住西亭文書複製本から原漢文を翻刻。
- 37 日祖韓役所俘明人呉祥瑞渤澥某等始陶於漢津。後移於有田是號本山。辻某者世製御物授陸常大掾。又開官窯於大河内山專職東獻諸品。又南河原酒井田氏工於型製。三所者為上品。其磁聖之所出名泉山。又有小城松谷窯品同三所而今絶。其他有志田・黒嚕・白石諸山。出甕者多津於伊萬里。故他邦総稱為伊萬里陶。
- 38 『陶説』説古四一「清秘藏。論窯器、必曰柴汝官哥定。柴不可得矣」に拠るか。

- 香山社中土香山、此云介遇夜摩以造天平瓮八十枚平瓮、此云毗邏介并造嚴瓮而敬祭天神地祇嚴瓮、此云怡途背、亦為嚴呪詛。如此、則虜自平伏』嚴呪詛、此云怡途能伽辭離。天皇、祇承夢訓、依以將行……天皇甚悅、乃以此埴、造作八十平瓮・天手挾八十枚手挾、此云多衢餌離嚴瓮、而陟于丹生川上、用祭天神地祇。
- 6 弟磯城が葉盤八枚に食物を盛つて八咫鳥を饗応し神武天皇に恭順した逸話。『日本書紀』卷三「時弟磯城憊然改容曰『臣聞天壓神至、旦夕畏懼。善乎鳥、汝鳴之若此者歟』。即作葉盤八枚、盛食饗之。葉盤、此云毗羅耐」。
- 7 垂仁天皇の皇后である日葉酢媛命が亡くなった際、殉死を禁止していたため野見宿禰が土部百人を出雲から呼び寄せ、人馬その他の形の埴輪を造ることを奏上。その功績により土師姓を賜ったことを指す。『日本書紀』卷六「野見宿禰進曰『夫君王陵墓、埋立生人、是不良也、豈得傳後葉乎。願今將議便事而奏之』則遣使者、喚上出雲國之土部老伯人、自領土部等、取埴以造作人・馬及種種物形獻于天皇曰『自今以後、以是土物更易生人樹於陵墓、為後葉之法則』。天皇、於是大喜之……仍号是土物謂埴輪、亦名立物也。……天皇、厚賞野見宿禰之功、亦賜鍛地、即任土部職、因改本姓謂土部臣。……所謂野見宿禰、是土部連等之始祖也」。
- 8 斎部（忌部）は祭祀や祭具制作を、土部（土師部）は土師器製造を担った品部で、これらが備前と出雲に置かれたと述べている。
- 9 伏羲と神農のこと。
- 10 堯は陶及び唐に封ぜられ陶唐氏を称した。
- 11 『陶説』説古三三「史記。五帝本紀。舜陶河浜。河浜器、皆不苦鹹。作什器於寿邱」。『史記』五帝本紀「舜耕歷山、漁雷沢、陶河浜、作什器於寿丘」。
- 12 『孟子』公孫丑上「孟子曰……大舜有大焉、善與人同。舍己從人、樂取於人以為善。自耕、稼、陶、漁以至為帝、無非取於人者。取諸人以為善、是與人為善者也……」。
- 13 『孟子』離婁章句下「孟子曰、人之所以異於禽獸者幾希。庶民去之、君子存之。舜明於庶物、察於人倫。由仁義行、非行仁義也」。
- 14 陶正は陶工の司役の官名。『陶説』説古二九「黃帝陶正、設官之始」。
- 15 『陶説』説古三五「考工記。埴埴之工、陶旒」に拠るか。考工記は『周礼』の一篇。
- 16 『陶説』説古三三「虞關父、入周為陶正。陳敬仲、奔齊為工正。亦或以上陶之裔故也」に拠るか。『春秋左氏伝』六〇子產献陳捷于晉襄公二十五年「昔虞關父為周陶正。以服事我先王」。陶正は陶工の司役。春秋時代の陳完は齊で百工を統率する工正の職に任ぜられた。
- 17 『礼記』郊特牲「器用陶匏、以象天地之性也」。陶匏は素焼きの器のこと。
- 18 『陶説』説古三九「邢瓷類銀、越瓷類玉」。越瓷は越州窯の瓷器、邢瓷は邢州窯の瓷器のこと。
- 19 『陶説』説古一〇「唐曰千峰翠色、柴周曰雨過天青」に拠るか。同書古窯考の各窯の項にも同様の説明あり。
- 20 『陶説』説古四五「格古要論。官窯器、宋修内司燒者……有蟹爪紋、紫口鉄足、好者与汝窯相類」。
- 21 底本及び東博所蔵瑠璃釉皿では「琇」、大宅翻刻では「琇」。垣南が自註で説明しているように釉薬の意。
- 22 「輪葉」は「うわぐすり」すなわち釉薬のこと。
- 23 茶壺、茶心壺のこと。煎茶道具の一種で茶葉を入れる容器。
- 24 雲屯は煎茶に用いられる水指。

久、古貌難還世稱傳京青磁。撰算田窯、得其一斑。淡路緑紫、後出先鞭。研智得巧、物産罔殫。其余瓷器、品類百千。資天草石、摹擬以銜。斯皆讓我、独歩区寰。伊港舶載、海運牲々肥前諸陶、自伊萬里燒、猶磁器稱南京。稱伊萬里燒、猶磁器稱南京。。傳播孔広、歐羅米堅。尚我文物、皇風永延。矧我邦内、資奉晨昏。養老慈幼、洽斯成歆。于飲于食、洪恩不諼。賛揚陶事、薄斯研鑽。盈缶之孚、視諸蕪篇。

(二) 詠磁器

詠磁器

与同社分題肥前名物百六十七種之一³⁵。日祖韓役所撫畧渤海某等与明吳祥瑞、採小城白坂之瓷聖創陶於松谷。後移于杵島郡有田、開瓷聖壙於泉山。又別開官窯於大河内山、專職東獻諸品。又有田辻某世製内御物。南河原坂井田氏工於範製印器。三処者為上品而有田号本山。其他(有)広瀬、黒贈、藤津郡吉田志田、三根郡白石山諸窯。其出鬻者多津於松浦郡伊萬里。故他邦総稱為伊萬里燒。

松谷初呈祥瑞才。泉山瓷聖寔靈哉。精工本得龍缸秘明之禁窯名龍缸。古制復同柴器開青磁之制自古唐有之、周宋最盛有柴汝官哥之稱。至元而絶。我大河内竊却得復之後潰亦復之而不如。我有古觀也。。美見錦紋絺繡耀田赤繪甚皆業錦手金襴。明人所謂雲絳繡花是也。。清知峯翠潤青滴為上。我工倣之稱染漬。損傷有瑕者。。闔国都捐瓦缶来。

維時 文久四年歲在甲子春三月中澣偶 録旧製 埴南武富定保

注

- 1 北村弥一郎は、賛の制作を命じたのは十一代佐賀藩主鍋島直大としているが、安政五年当時の藩主は直正であり、序文中の「公」も直正を指す。
- 2 「泥皇」は宇比地邇神ひぢののかみ(埴土養尊)、「沙皇」は須比智邇神すひぢののかみ(沙土養尊)のこと。『日本書紀』卷一「次有神、埴土養尊。埴土、此云于毗尼。沙土、此云須毗尼。亦曰埴土根尊・沙土根尊」。
- 3 大国主神と少名毘古那神のこと。
- 4 底本では「扶」だが、「挾」の誤写か。手挾は土器を手で作ること、あるいは土器の一種。
- 5 神武天皇が大和平定の際、夢告に従つて天香久山の赤埴、白埴で土器を作り、天神地祇を祀つて戦に勝利した逸話。『日本書紀』卷三「夢有天神訓之曰『宜取天

宋代汾襲、

柴器為冠

汝窯官窯、

哥窯繼塵

紫口鉄足、

蟹爪氷紋

吉安宣紅、

質而雅馴。

雖有劣者、

雖我皇朝、

用之吉蠲。

上日享礼、

進御御前

斯皆河南、

江浙攸埏。

石質灌塼

玲瓏琳珣

建盞飴琇

天目騰芬

我稱唐物、

砂壺盈拳。

用盛茶末、

処謂雲屯。

黃缶黑窯、

砂泥迭渾。

陽羨白泥、

朱紫偕純。

惜哉江西、

經宋末艱。

文相一過、

瓷琇結団。

是日窯

變、

靈矣感冤。

肆自元代、

青瓷乃泯。

肆重越器、

比諸瓊璠。

磨治碎片、

用為珮環。

宝藏代興、

造物匪慳。

爰有青花、

自安南伝。

浮梁樂平、

黑

赭採掄。

煨之研之、

出藍可觀。

伝之白瓷、

洵美清真。

永樂渾厚、

宣德孔段。

成化染漬、

精画彬々。

菊稜葵稜、

形模都間。

御窯金績、

錦緞維旬。

貨請我者、

自江浙湄。

概称南京、

慳不究根。

其称間渡、

碧碌簇攢。

鶯謂北京、

抑何攸援。

矧彼白定、

高麗之粉。

若涅繫羅、

以蓋為珍。

御本判使、

名称多般。

若宋光祿、

皆商賈言。

漢韓不弁、

瓷砂不分。

乃至印度、

音称訛愆。

球伊羅保、

併属諸韓。

其不錯者、

交趾南蛮。

白泥而塼、

斯知窩蘭。

其称本國、

燒煉瑤珉。

在我中世、

茗飲偕親。

凡厥諸器、

砂泥是尊。

備前伊勢、

恢古以振。

瀬戸独擅、

諸名掩填。

伊賀丹波、

別簇窯煙。

粟田清水、

翹称京園。

信樂之

甌、

海内布宣。

深草伏水、

泥礪難捐。

伝高麗者、

肥前唐津。

暨萩松本、

古樸可欣。

筑之高取、

効建器輦。

肥矢上陶、

与印度均。

黑蓋黑窯、

又建

之斑。

武雄鹿島、

巨罌团欒。

插盆砂坑、

産桃川辺。

尾崎泥器、

興工王臣。

復土師旧、

民用不貧。

在豊公時、

聚樂捏垣。

泥而施塼、

黑赤

之顔。

織部好事、

志野為賢。

白塼如乳、

黝画卷連。

薩収韓俘、

陶戸成村。

駢砂驪塼、

雖野寔惇。

諸窯雖盛、

瓷制未詢。

建哉日祖、

創事垂勲。

百戰之際、

慮民攸安。

制産無遺、

来工連駢。

韓氓既在、

招明又臻。

皎々瓷聖、

在白阪嶺。

松谷之隩、

始試燒燔。

祥瑞呈巧、

精器絢爛。

乃相西陲、

窯戸斯遷。

泉山之壤、

不尽如泉。

維大河内、

官工攸群。

傲明御窯、

燒坏脩刪。

飾及盤跌、

進献維虔。

如金

續工、

別占肆鄰。

作方作稜、

推南河原。

応報瓶子、

祭醕猷醇。

一瀬広瀬、

黒噌分畛。

外尾内野、

吉田志田。

儔品雖下、

比他則娟。

白石之窯、

別

在東岨。

馬牙冰断、

安南可攀。

如三河内、

他管而隣。

以薄為巧、

莫敢頡軒。

唯尾張窯、

以盛美聞。

砂器巢全、

瓷制亦研。

工巧質脆、

或恐緇磷。

龜山猶可、

瓷質好完。

錯發祁聖、

画手慇懃。

若夫玖谷、

在北陸垣。

其醉美者、

有田同銓。

饒之青磁、

清復之云。

曠絶已

宋代汾襲、

柴器為冠

汝窯官窯、

哥窯繼塵

紫口鉄足、

蟹爪氷紋

吉安宣紅、

質而雅馴。

雖有劣者、

雖我皇朝、

用之吉蠲。

上日享礼、

進御御前

斯皆河南、

江浙攸埏。

石質灌塼

玲瓏琳珣

建盞飴琇

天目騰芬

我稱唐物、

砂壺盈拳。

用盛茶末、

処謂雲屯。

黃缶黑窯、

砂泥迭渾。

陽羨白泥、

朱紫偕純。

惜哉江西、

經宋末艱。

文相一過、

瓷琇結団。

是日窯

變、

靈矣感冤。

肆自元代、

青瓷乃泯。

肆重越器、

比諸瓊璠。

磨治碎片、

用為珮環。

宝藏代興、

造物匪慳。

爰有青花、

自安南伝。

浮梁樂平、

黑

赭採掄。

煨之研之、

出藍可觀。

伝之白瓷、

洵美清真。

永樂渾厚、

宣德孔段。

成化染漬、

精画彬々。

菊稜葵稜、

形模都間。

御窯金績、

錦緞維旬。

貨請我者、

自江浙湄。

概称南京、

慳不究根。

其称間渡、

碧碌簇攢。

鶯謂北京、

抑何攸援。

矧彼白定、

高麗之粉。

若涅繫羅、

以蓋為珍。

御本判使、

名称多般。

若宋光祿、

皆商賈言。

漢韓不弁、

瓷砂不分。

乃至印度、

音称訛愆。

球伊羅保、

併属諸韓。

其不錯者、

交趾南蛮。

白泥而塼、

斯知窩蘭。

其称本國、

燒煉瑤珉。

在我中世、

茗飲偕親。

凡厥諸器、

砂泥是尊。

備前伊勢、

恢古以振。

瀬戸独擅、

諸名掩填。

伊賀丹波、

別簇窯煙。

粟田清水、

翹称京園。

信樂之

甌、

海内布宣。

深草伏水、

泥礪難捐。

伝高麗者、

肥前唐津。

暨萩松本、

古樸可欣。

筑之高取、

効建器輦。

肥矢上陶、

与印度均。

黑蓋黑窯、

又建

之斑。

武雄鹿島、

巨罌团欒。

插盆砂坑、

産桃川辺。

尾崎泥器、

興工王臣。

復土師旧、

民用不貧。

在豊公時、

聚樂捏垣。

泥而施塼、

黑赤

之顔。

織部好事、

志野為賢。

白塼如乳、

黝画卷連。

薩収韓俘、

陶戸成村。

駢砂驪塼、

雖野寔惇。

諸窯雖盛、

翻刻

凡例

- 一、各底本については解題を参照のこと。
- 一、漢字表記は原則として常用漢字を用いたが、一般に用いられることの多い異体字・別体字についてはこれを採用した箇所がある。
- 一、句読点については句のまとまりや読みやすさを考慮して底本から適宜変更、加除した。
- 一、改行や段落分けについてもまとまりを考慮して底本から改めた。
- 一、闕字は省略した。

(二) 陶器賛並引

日域之工治為盛而陶亜之。然治多備於非常、陶則日用資焉。但自古貢獻、雖稱瓷器、其有泥器砂器而已。我日峰公始創瓷窯、邦產於是加盛、足以輸出裨国。公克繼述之、濬慮於陶事。維安政五年戊午十一月命作文賛之¹。臣定保奉承盛意、素請求陶要。

乃賛曰。天地方闢、混沌氤氲。一氣幹運、乃軫洪鈞。磅礴凝質、生物生人。誰其象之、創此陶甄。捏垣埴、廻旋輪困。閱彭聃、唯命之遵。邈矣我邦、上古聖神。泥皇沙皇²、德象厚坤。有道有器、莫知厥源。大已少彥³、開物頻繁。窟宅陶穴、蓋已造端。乃有掘据^{謂之掘据、縣尊無鉄、}是繼汚罇。代杯飲者、瓦杯存淳^{俗呼土罇瓦罇。又汎稱土器。}又有扁壺、勾玉納焉。穴居攸用、匪措維懸。及神武皇、降臨中躔。有神知彥、採土香山。心祝手扶⁴、良器乃陳。平甕嚴甕、以祝以禋。

定丕々基、開濟屯蹇。時弟磯城、思奉天孫。八器饗使、將缶將盤。至垂仁朝、禁殉寔恩。野見宿禰、巧思開便。塑以就陶、号曰埴輪。賜土師姓、永言弘仁⁷。由茲厥後、為陶是蕃。葉盤高埴、羞蠶薦膳。高坏窪坏、謂豐与盆。庶方並作、孰後孰先。齋部土部、在備与雲⁸。伊勢瓶子、普用祀賓。我

土師郷、亦誰昔然^{神埼郡。有土師郷。}何俾行基、令名敢專^{世觀呼古陶。為行基燒。}咨彼西疆、利用厚生。維義暨農⁹、何肇何浚。堯号陶唐¹⁰、其必有因。及大舜出、効智河浜¹¹。

取人為善¹²、明物察倫¹³。器不苦窳、規型永存。乃至裔胄、陶正世宦¹⁴。歷夏殷周、厥職不淪。考工謹記¹⁵、陳勝承勤¹⁶。礼用陶匏¹⁷、重於瑤琨。矧舜之遺、土脈罔堙。定刑革治、白堊猶埴。瓠越入漢、窯器一新。越瓷比玉、邢瓷比銀^{又作瓷。同磁。}¹⁸。唐尚翠色、如攬峰巒^{古越翠瓷。我。俗呼珠光青磁。}周好天青、千春新鮮¹⁹。

https://static.saga-ebooks.jp/actibook/data/p-sagajimeijiten_202303300000/HTML5/pc.html#page/1578 (1014年1月16日閲覧)

- ・石割松太郎、一九三四、『祥瑞の研究』、宝雲舎
 - ・宇治章、二〇一七、『肥前名物題註』にみる佐賀の名物・特産品について、佐賀県立博物館・美術館編『調査研究書』第四一集
 - ・大宅経三、一九二二、『肥前陶窯之新研究 上巻』、田中平安堂
 - ・尾崎洵盛、一九八一、『陶説注解』、雄山閣出版
 - ・北村弥一郎、一九〇二、『雑報 陶器賛并引』、大日本窯業協会編『大日本窯業協会雑誌』第一〇巻第一一八号
 - ・久米邦武、一九三四、『久米博士九十年回顧録』下巻、早稲田大学出版部
 - ・小宮木代良、二〇〇九、『陶祖』言説の歴史的前提、北島万次他編著『日朝交流と相克の歴史』、校倉書房
 - ・小宮木代良、二〇〇九、『陶祖』言説の成立と展開、『九州史学』、九州史学研究会
 - ・佐賀県立九州陶磁文化館編、一九八三、『近代の九州陶磁』
 - ・佐賀県立美術館編、二〇〇二、『佐賀鍋島藩の美術』
 - ・鹽田力蔵、一九三五、『日本磁器の創業』、東洋美術研究会編『東洋美術』第二一号
 - ・鈴田由紀夫、二〇二二、『香蘭社 歴史と作品変遷』、創樹社美術出版
 - ・千住生(武次郎)、一九三九、『肥前名物題註』、肥前史談会編『肥前史談』第一三巻第五・六号
 - ・徳永貞紹、二〇二三、『肥前小城松香溪焼の基礎的研究』、佐賀県立九州陶磁文化館編『佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要』第八号
 - ・中島吉郎・太田保一郎、一九四一、『佐賀先哲叢話』、佐賀郷友社
 - ・中島浩氣、一九三六(一九八五)、『肥前陶磁史考』、肥前陶磁史刊行会(青潮社)
 - ・中野礼四郎編、一九二二、『鍋島直正公伝』第三編、侯爵鍋島家編纂所
 - ・米国博覧会事務局編、一九九九、『米国博覧会報告書』、フジミ書房
 - ・細川潤次郎、一九二三、『十洲詩鈔』卷二三・二四
 - ・諸橋轍次、一九五八(一九七六)、『大漢和辞典』、大修館書店
 - ・矢部良明、二〇〇二、矢部良明他編『角川日本陶磁大辞典』、角川書店
- (史料)
- ・金森得水『本朝陶器攷証』安政四年(一八五七)
 - ・千住西亭文書一四(複製本) 佐賀県立図書館蔵 請求番号…複千〇一四

など、今日では容れられないような説も含んでいるが、むしろそうした誤解や俗説も含めて内容を吟味し、佐賀藩の陶磁関係史料や同時代の陶書などとの比較を通じて評価することが不可欠である。これについては本稿では及ばなかったので他日稿を改めたい。

なお、本稿執筆にあたり、当館の徳永貞紹シニア・アドバイザー・フェローほか学芸課職員から助言や示唆を得た。

注

- 1 圀南自筆本を所蔵していた佐野安麿は旧制第四高等学校助教授や小城中学校校長などを歴任した教育者である。佐野家は小城藩医であるが、白山武富家と姻戚関係（圀南の墓碑によると母は佐野氏）にあり、父文仲が圀南と幼馴染みであった関係で自筆本が安麿の手に伝わっていたという「大宅、一九二二・二八七」。文仲は佐賀藩医福地道林の娘を妻に迎えたが、福地の屋敷は佐賀城下八幡小路の圀南私塾のすぐ隣であった「中野、一九二一・四八四」。このほかの伝本として圀南手元控え本、納富介次郎本、大宅写本を写した伊丹彦次郎本や中野五郎本などがあった「大宅、一九二二・二八八」。
- 2 いずれも底部にほぼ同文の銘が記され、東博蔵品には「此篇、博覧会事務局納富君所珍藏詳尽陶之要、友人深川兄請予書曰、是米国博覧会出品之一也。予不敢辞課児童之余。草々。把毫一揮」とある。これにより、この皿が明治九年（一八七六）のフィラデルフィア万国博覧会に出品予定であったこと、博覧会事務局の事務官であった納富介次郎が「陶器賛並引」の恐らく写本を所蔵しており、当時白川小学校長であった江越は香蘭社社長深川栄左衛門の依頼を受けて納富本をもとに揮毫したことが判明する。ただし、フィラデルフィア万博出品目録に該当するものは確認できず、実際に出品されたかどうかは不明である。
- 3 阪谷朗蘆宛武富圀南書翰（年不明八月二十四日付）、国会図書館憲政資料室蔵「阪谷朗蘆関係文書」書翰の部一〇〇
- 4 『十洲詩鈔』卷二三「肥前陶師某乞詩、乃書此詩与之 西肥到处簇窯煙。精器一年多一年。孰繼圀南老居士。賛揚陶事作新篇。
肥前入武富圀南作陶器賛文。字現曉。文中有賛揚陶事語。
- 5 資料名・武富圀南磁器七律詩書、収蔵番号・〇三二七五、一九九五年受入、竹田礎智夫氏寄贈、紙本墨書・掛幅装、寸法・一〇七・〇×三三・二センチメートル。伝来の経緯は不明だが、箱の蓋裏書には「昭和十一年歳次丙子春日 精斎簽書」とある。「精斎」なる人物について、断定はできないが、佐賀出身の医師持永精斎である可能性を指摘したい。持永が佐世保市で医院を開業していた時期に寄贈者竹田礎智夫氏の父である恒夫氏も市内で医院を開業されており、佐賀藩時代の事情を知る持永に箱書きを依頼したことが推察される。

参考文献

- ・生馬寛信、一九八三、「有田の陶磁業教育と江越礼太」、九州教育学会編『九州教育学会研究紀要』第一二巻
- ・伊香賀隆、二〇二三、「武富圀南」、佐賀県立佐賀城本丸歴史館編『佐賀県人名辞典』

子が描かれる。市ノ瀬山、広瀬山、黒牟田山、外尾山ほか、内野山、吉田山、志田山などに加え、白石しろいしや三川内にも言及している。末尾では、瀬戸や亀山、九谷、三田など他産地の磁器と比較して肥前磁器の優越を説き、遠く欧米にまで流通し、国家に貢献していることが謳われる。

このうち中国陶磁に関する部分は、乾隆三十九年（一七七四）に朱琰しゅえんが著した『陶説』を参照したことが明らかである。『陶説』は文化三年（一八〇六）葛西因是が、文政一〇年（一八二七）青木木米が翻刻し、それぞれ市河米庵、頼山陽が序文を寄せている。青木版は木米没後の天保六年（一八三五）五〇部程度が版行されたのみで長らく稀覯本であった「鹽田、一九四四」。中国で刊行された諸本も日本に舶来した部数はわずかであったので、圀南は葛西版に拠った可能性が考えられる。朝鮮陶磁や日本陶磁に関する部分がどの文献を参考にして書かれているかは今後考究すべき点である。

なお、圀南と親交のあった漢学者の間で「陶器賛並引」の存在は早くから知られていたようである。明治五年（一八七二）〜七年（一八七四）頃、圀南は詩会で交わっていた阪谷朗廬に自らが所蔵する「陶器賛並引」を貸し出しており、そのさなか博覧会事務局関係者から借用希望があったため返却してくれるよう依頼している³。また、北村翻刻公刊後の例だが、明治四三年（一九一〇）頃細川潤次郎は肥前地方の陶工に請われて作った詩において、誰かが圀南の遺業を継いで新しい陶器賛を作ること期待している⁴。「細川、一九二三・二二」。

「詠磁器」は圀南自筆の書幅が今日まで伝わり、現在は佐賀県立九州陶磁文化館（以下、九陶）が所蔵している（写真四〇六参照）。異本が存在する可能性もあるが、確認されている限りでは九陶本が唯一のテキストである。従来その存在を含めてほとんど注目されてこなかったが、近年、小城の松香溪焼に関する江戸後期の認識を示すものとして「陶器賛並引」とともに取り上げられた「徳永、二〇二三」。

九陶本は「詠磁器」という詩題の下に『肥前名物題注』第八「磁器」を一部修正した文章が序文的に記されている。こちらも詩句の間には圀南自註が挿入され、字句の補足説明がなされている。七言律詩形式の詩は、肥前磁器が中国陶磁を手本に青磁・金襴手・染付など各種類において展開してきたこと及びその美しさを謳いあげる。呉祥瑞・渤海某による小城松ヶ谷での磁器の試焼に始まり、泉山での陶石発見以後、景德鎮窯の技術水準に迫り、あるいは周・宋の名窯に匹敵する青磁を復活させ、美しい色絵や染付を作り出してきたという。「陶器賛並引」を縮約したかのような内容だが、表現や語彙に多少の相違がある。落款部分には文久四年（一八六四）三月の「録旧製（旧製を録す）」とあるので、詩が作られた時期はこれ以前であることが分かる。

二つの詩は幕末段階での肥前陶磁史の認識や言説を示す一例としての意義を有する。呉祥瑞・渤海某らが松ヶ谷で磁器の試焼を行ったとしている点

東京で死去した。墓は東京都港区の青山墓地と佐賀市呉服元町の称念寺にある。著書に『密菴詩文集』、『密菴文類略抄』、『嘉田中村先生行状』、『通訳辨体』など「伊香賀、二〇二三・中島・太田、一九四一」。

二篇の詩の翻刻に先立ち、書誌情報と梗概を述べておきたい。

「陶器贊並引」は大正期まで圀南自筆の原本が伝わっていたことが確認できるが、現在その存否は不明である。明治三五年（一九〇二）北村弥一郎が『大日本窯業協会雑誌』第一〇巻第一一八号に、大正十年（一九二一）大宅経三が『肥前陶窯之新研究』上巻に全文を翻刻した。兩人とも佐野安麿が所蔵していた圀南自筆本を借覧して書き写しているが、くずし字の解読や句の切り方に多少相違があり、それぞれに明らかに誤写と思われる字が複数含まれる¹⁾。さらに、書写あるいは印刷の過程で、詩句の間に挿入されていた圀南自註が本文に紛れてしまい、詩の本来の形が崩れてしまっている。

また、明治九年（一八七六）江越礼太が香蘭社製の瑠璃釉変形皿に贊のみを金泥で揮毫し焼き付けたものが二点伝存しており、香蘭社と東京国立博物館（以下、東博）に所蔵されている「鈴田、二〇二二・三四」²⁾。香蘭社所蔵品は金彩が剥落しており判読が難しいが、東博所蔵のものは比較的鮮明であり十分に判読できる（写真一〜三参照）。複数箇所の子句の欠落ないし意図的な省略がある一方、北村や大宅の翻刻で不明とされた字が書き写されているなど参照すべき点も多い。

本稿では北村翻刻を底本とし、大宅翻刻と東博所蔵品に拠って校合した。詩句と註は分け、原文の構成を復元した。

「陶器贊並引」は序文と四言詩の贊からなる。序文では、藩祖鍋島直茂以来の陶磁器生産に直正も大いに意を用いており、今般陶磁器に関する贊を作るようにとの命が下った旨が述べられている。贊は内容から前段と後段に分けることができる。前段は日本神代から中国古代く明代、朝鮮に至る陶磁史や日本に請来され珍重されてきた陶磁器について述べる。記紀の国土創造に始まり、天神地祇による開物、神武東征時の平甕・嚴甕制作、野見宿禰の埴輪発明、堯・舜ら聖帝たちの陶業、漢代以降の青磁・赤絵・天目・紫泥朱泥・青花（染付）・金欄手など諸種の中国陶磁、高麗茶碗などの朝鮮陶磁、宋胡録など東南アジアの諸陶、仏郎嵌という明清代の七宝にまで触れている。後段では日本の諸陶が取り上げられ、北部九州周辺では唐津、萩、高取、矢上、黒牟田、武雄、鹿島、藤ノ川内、尾崎などの窯業地の名が製品の特徴とともに列挙される。なかでも有田焼を中心とする肥前磁器の叙述は詳細である。文禄・慶長の役で鍋島直茂が朝鮮半島から陶工を連れ帰り、あるいは明人の呉祥瑞と渤海某が小川の松ヶ谷で磁器の試焼をしたことに続き、泉山で陶石が発見され、大川内山の將軍家献上品、辻家の禁裏御用品、赤絵町の色絵、南川原山の型物、^{なんがわらやま} 応法山の瓶子^{おうぼうやま}などが発展してきた様

【資料紹介】

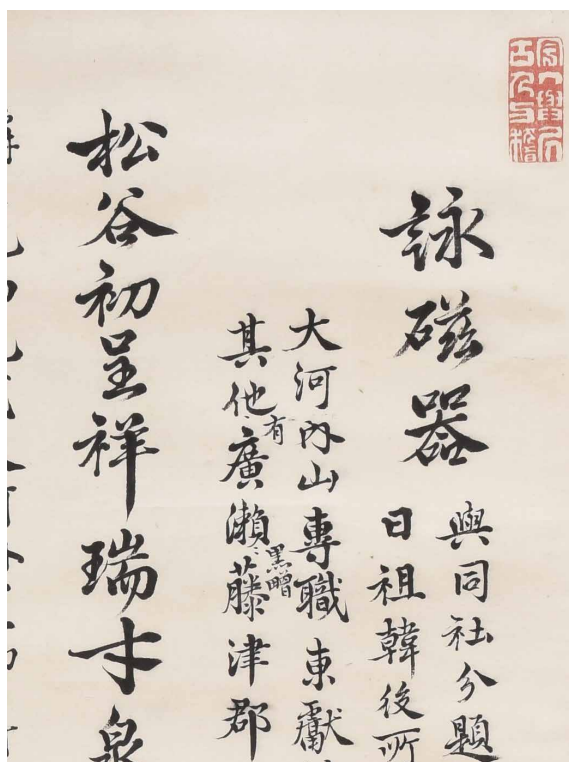
武富圯南「陶器賛並引」及び「詠磁器」

芳野 貴典

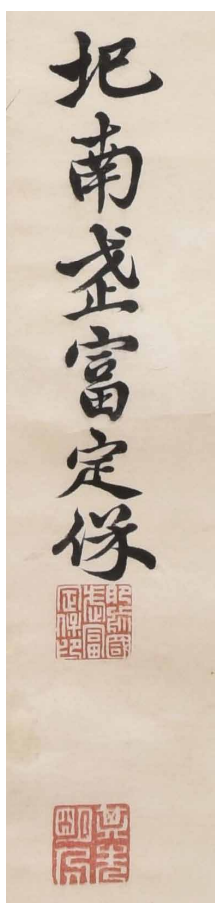
解題

幕末佐賀藩の儒者武富圯南（一八〇八～一八七五）には肥前陶磁に関する二篇の詩がある。安政五年（一八五八）十一月に十代佐賀藩主鍋島直正の命を受けて作った「陶器賛並引」と、詳しい制作時期は不明ながら文久四年（一八六四）三月以前作の「詠磁器」である。いずれも中国の経書や日本の記紀に見られる陶業伝承及び日本で珍重されてきた中国・朝鮮半島の陶磁器などに触れつつ肥前陶磁の歴史や特質を詠んだものである。圯南は陶磁器の専門家でも愛好家でもないが、朱琰『陶説』をはじめとする国内外の文献や藩内の記録、伝承に幅広く取材して詩作を行っている。なかには誤った理解や今日の研究では俗説として排除されるものも含まれているので多分に割り引いて読む必要があるが、幕末の佐賀藩において一学者が肥前陶磁史をどのように理解し、その叙述を試みたかを示す手がかりである。とりわけ「陶器賛並引」の制作は単なる文人の道楽ではなく、藩が殖産興業のため陶磁器生産に力を入れていた時期に公命によってなされたものだ。直正がそれをどのように活用するつもりであったかは知る由もないが、政策を進めていくなかで必要とされた物語＝歴史であったといえよう。

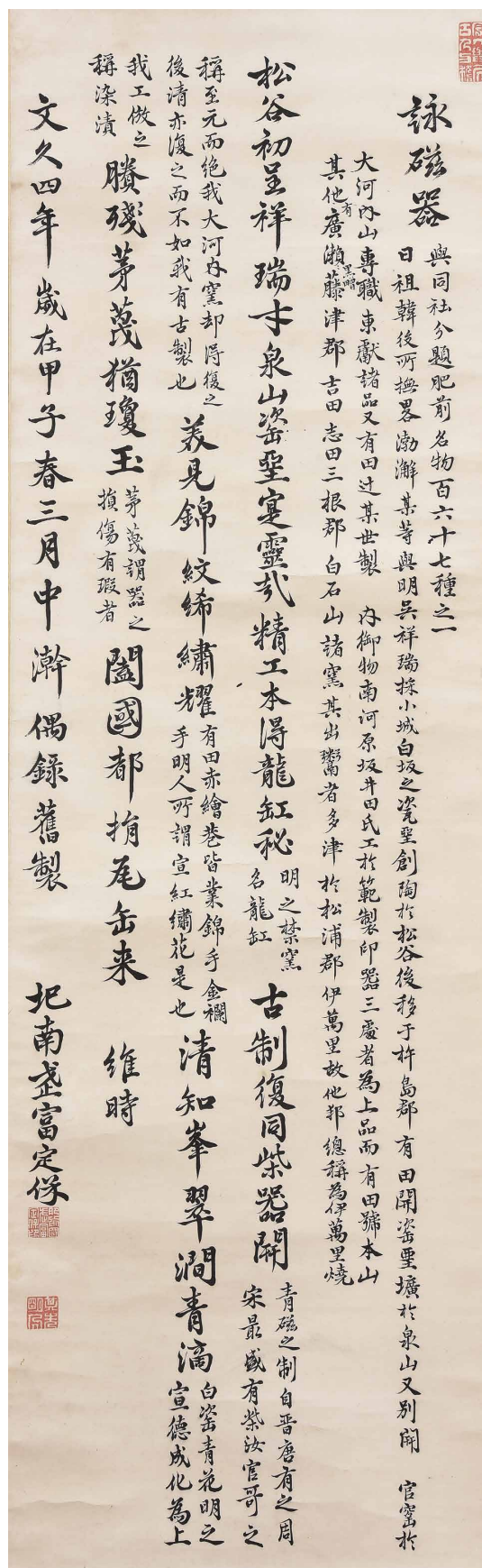
作者の武富圯南は文化五年（一八〇八）佐賀城下白山町の豪商武富家に生まれた。名は定保、通称は文之助、字は元謨、号は圯南・密庵・碧梧楼・洛斎・梧栖・右坪・款段子・天燭舎など。武富家は中世末以来日、帰化した明人「十三官道順」を始祖とし、のち白山・勢屯・大財の三家に分かれ、呉服商や幕吏向けの旅館、薬店「萬金丹」を営んだ。幼くして学問を好んだ圯南は、一五歳で実家の援助を受けて学問文芸の道に入った。江戸では古賀侗庵（幕府御儒者、佐賀藩出身で昌平黌教授となった古賀精里の子）について学んでいる。侗庵が朱子学批判の立場から「父は朱子の孝子だったが、自分はその忠臣となって誤りは諫め止めよう」と述べたのに対し、圯南は「忠臣であることは易しく孝子になるのは難しい。自分は孝子とならん」として朱子学を堅持した逸話は知られるところである。帰藩後は弘道館で教鞭を執った一方、城下八幡小路で私塾「天燭舎」を開き、大隈重信や久米邦武らに書、漢学を講じた。明治期に有田焼の絵付けを手掛けた画家高柳快堂も圯南から漢文と画法を学んでいる。直正は「もし私に文之助の学問の十分の一でもあれば、天下で自在に活躍できるだろう」と評したとされる。明治維新後は東京に移り住み、旧雨社などの漢詩結社で活動。明治八年（一八七五）、



【写真5】同 詩題部分



【写真6】同 落款部分



【写真4】武富圯南「詠磁器」
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
竹田礎智夫氏寄贈



【写真1】瑠璃釉金彩詩句文変形皿 香蘭社製 東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives



【写真2】同 落款部分

【写真3】同 底裏銘